

○乾 賢一^{1,2}

¹京大院薬名誉教授, ²京都薬大名誉教授

医薬分業の進展、医療の高度化・多様化など社会のニーズに対応するために、2006年4月から6年制薬学教育が始まった。薬学関係者は、多くの苦難を克服しながら新しい薬学教育制度の構築に取り組み、2017年3月には第6期の卒業生を社会に送り出すに至っている。さらに、2015年4月から改訂薬学教育モデル・コアカリキュラムが実施されており、この中には「薬剤師として求められる基本的な10の資質」が示されている。一方、薬剤師の業務内容も大きく変わってきた。チーム医療が進む中で、病棟における薬品管理、患者の服薬指導、医師の処方支援・薬物療法提案、在宅医療への参画など、薬剤師の業務内容が広く、深くなってきた。6年制薬学のネガティブな側面は、研究力の低下である。大学院修士課程の学生が激減したために、研究の推進に支障をきたしていることは否めない。学術研究の推進については、従来の既成概念にとらわれるのではなく、医学部を参考にした展開など、発想の転換が必要である。問題発見、問題解決型の教育に力を注ぎ、science（科学）、art（技術）、humanity（人間性）のバランスのとれた教育の実践は、質の高い薬剤師の養成だけではなく、研究能力を持った薬剤師（pharmacist-scientist）の育成や薬学研究の画期的な発展にもつながると確信する。

演者は、31年間大学病院薬剤部に在籍して薬剤業務、医学・薬学教育に従事し、その後薬科大学学長として6年制薬学教育を推進してきた。本講演では、これらを背景に私見を述べたい。